慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第七十一号）

目次

聖徳太子の御持言……花田正夫…(1)
願成就文に就いて……福島政雄…(4)
自然法爾(二)……自在丸新十郎…(8)
歌心そのをり〳〵……柳瀬留治…(12)

第七卷　第二號

聖徳太子の御持言

花田正夫

太子精神への開眼

二月は太子忌の月でありますので、この機会に『世間は虚仮なり、唯佛のみ是れ真なり』の太子の御持言を奉戴申して遠く深い御慈恩を謝しまつります。

さて私自身は、善悪も知らず、白黒も見えぬ愚者盲人でありまして、太子が我が国に誕生せられ、御教をお残し下さつていても、その真実の価値を知る力なく、ただ、偉人賢者、貴人、と伝へ聞く程度で私自身にとりましては全くよそびとでありました。

ところで岡山の高等学校に大正十一年に入学し、独乙語の池山教授に教へられて歎異抄を読み始め、やうやく親鸞聖人に親しむやうになり、段々と聖人の書に接して見ますと、聖人が太子を「和国の教主」「救世観音菩薩」「久遠の父母」と、しんから底から随喜渇仰せられてゐることの尋常一様でないのを知り、その聖人の真剣さに打たれてやうやく太子の眞面目に接したいといふ願ひを持ちはじめたのであります。

次いで近角先生の書によりまして、先生の御体験をとほしての太子憲法の信証を知り、ことに先生が懇切丁寧に嚙んでふくめるやうにお勧化下さるのを熟読するに及びまして、やうやく太子の御精神が私の生活の上に直接のつながりを持つて参りました。

更に福島先生や白井先生の御提撕を蒙り、太子の三経義疏や御伝記にも触れて参りました。とつおひつして居りますうちに、何時の程にか私自身が太子御入滅の四十九歳も過ぎ、五十路の坂も空しく越えました。そして最近になつて太子の御持言が、金言とし実語として無量のひかりといのちをもつて私の身を照し心を打つて参り、このことは私の生涯の大きな喜びとするところであります。

然し私自身はもとより凡愚の身でありまして、太子精神の中心である有名なこの御持言に就いても、群盲の象を語るといふ域を脱することは出来ません。太子の御精神は実

に底のなく深く、涯しなく広いので、汲めどもつきぬ泉の水の僅かに一掬を誌すばかりであります。

御持言の傳承

親鸞聖人の常の仰せが『親鸞一人がためなりけり』と『親鸞におきては唯念佛して』であつたと知れますことは聖人に親炙して下さつた方々の耳の底にそれが深く刻まれて後世に伝承せられおる筈であります、特に歎異抄の著者唯円大徳の御恩に負ふところが大であります。

すべて御持言といふものは、その人の生命となり、肉体となつてゐるもので、申される御自身はむしろ無意識的、反射的で、朝夕ぢかに接する人々の耳の底に自然に刻みこまれるものであります。然し身辺に侍する者が單にそれを聞いて覚えてゐるといふだけでは、オームの口眞似で、その言葉は死語となつてゐるのであります。ところがそれを聞いた者の機縁が熟して、心に泌み身に徹つて、血肉となり筋骨となるとき、初めて生命のある言葉として世に掲げられ、世間も亦この妙音に耳をそばだてるのであります。

さて太子の御持言を聞きとつて下さり、更に生ける言葉として世に伝へて下されたのは、御妃橘女王で、そのことは中宮寺の天壽国曼荼羅の銘文に誌されてあります。

それにつけましても千三百年昔を憶ふのであります。推古の御代に御年二十、推されて太子の位に即かれました。然し内憂外患の絶え間もなく国歩難渋の秋、重責を一身に荷はれて、先づ御自ら深く佛道に入られて、世間虚仮唯佛是眞の無碍光を被られたのであります。斯くて内なる解決は外に建現して国是を定め、人材登用の途を開き、大陸文化を移入し、肇国以来空前の進歩を招来して下されたのであります。ここに天は地を覆ひ、地は天を戴せて天下和順し四時の順行も賀頌の声に迎へられたのでありますが、痛恨の極みは、四十九歳の御盛年で太子が疫病で急逝せられたことであります。その時の国中の悲歎の姿は、太子滅後百年も経て編纂された日本書紀に次の如く生々しく記されてあります。

『是の時、諸王、諸臣、及び天下の百姓、悉くおきなは愛兒を失ふが如く、あぢはひ口にあれども嘗めず、わかきは慈父母を亡ふが如く、哭泣の声行路にみてり、すなはち耕夫はすきを止め、舂女はきおとせず。皆曰く、日月輝を失ひて天地すでに崩れぬべし。今よりのち誰かたのまむ』

国をあげての哭泣追慕、哀悼愛着の有様が手にとるやうに感得されます。然し、何人よりも〳〵、太子の御妃、橘女王の御悲歎は悽絶の限りでありまして、人の世の如何なる慰撫の言葉も、御妃の悲魂をどうすることも出来ず、あ

らゆる人々の手のとどかない憂悲苦悩の深淵に落ちこみ、崩折れ給うたことは、曼荼羅の銘文によつてその片鱗に触れることが出来ます。

『年は辛巳にあり、十二月二十日、くれつかた、孔部間人（アナホベノヒト）母王かんさりましぬ。明年二月二十二日夜半、太子かんさり給ふ。時に橘大女郎、悲哀歎息、畏き天皇の前にもうして曰はく。これをもうさんは恐ると雖も、懐ふ心止み難し我が大王、母王とともにはかりしが如くかみさりまして、痛酷たぐひなし。

我が大王の告げ給ふ所は、世間は虚仮なり、唯佛のみ是れ眞なりと。其の法を玩味すれば、謂ふに我が大王は應に天壽国の中に生れ給ふなるべし。しかも彼の国の形は眼に見がたき所なり。願くば図像に因つて大王往生の状を観んと欲ふと。

天皇これをきこしめし、悽然として告げて曰く。一に我が子のもうすところあるは、誠に以て然りと為すと』

惟ふに、太子御入滅後の女王は、来る日も〳〵、何を召し上られても口に味ひもなく、何時夜が明けたのか、何時日が暮れたのかさえもおわかりにならぬまでの御悲歎に沈まれたことでありませう、実に身は八ツ裂きにされ、一切の骨が微塵に碎かれるといふ地獄の苦相の底に立ち給うて『世間は虚仮なり、唯佛のみこれ眞なり』との太子の常の仰せが、女王の心耳に新しく響いたのであります、生ける言葉として女王の悲魂に徹したのであります。

「涙にぬれて夜を徹した人にこそ、曙の光を喜び迎へることが出来る」とゲエテも申して居りますが、幾日も幾夜も涙に明け涙に暮れた女王の胸に、無碍の光明が射し初めたのであります。唯佛是眞の慧日に照されて、世間虚仮の生死の闇が破られ永遠の曙を迎へられたのであります。

光が射した、夜が明けた。その佛光の照護の下に、橘女王は、太子が現に生れます国、天壽国を感得せられたのであります。『我が大王の告げ給ふ所は世間は虚仮なり、唯佛のみ是れ眞なりと。其の法を玩味すれば、謂ふに我が大王は應に天壽国の中に生れ給ふなるべし』とは、その慶びのおのずからなる表白であります。斯くて「今生夢のうちのちぎりが、来世さとりのまへの縁」と結ばれたのであります。また「別離久長にしてまた相会ふこと難き身」に一切の罪業を一味の潮に転ずる広大な佛心のまことがあらはれて、倶会一処の信証を得られたのであります。懸崖に手を放つて絶後に蘇るとも申すべき無上の御信証であります。

内に湧き満つる慶びは、やがて外に溢れ出ずにはおかない。女王はかくて推古天皇の御前に進み出られて「懐ふこと止み難き願」を悲喜の涙の中に申し出られ、曼荼羅造作の勅許を頂かれたのであります。憶ふに推古天皇は敏達天皇の皇后でましましたので、すでに愛別離苦の悲哀を深く身に経験せられた方とて、橘女王が涙で語られる一語一語を、また涙をもつて聞きとり給うて『天皇これをきこしめし、悽然として告げて曰く、一に我が子のもうすこと誠に以て然りとす云々』となつてをります。ここの『悽然として』の一句は、その間の消息を深く知らされます。

以上の如くにして、太子の御持言は、橘女王の心をひらき、それがそのまま天壽国の感得となり、太子の金言実語『世間は虚仮なり、唯佛のみこれ眞なり』は、その銘文に刺繍せられて世に不滅の光を放つて下さつたのであります

未　完

願成就文に就いて

福島政雄

そのあとは『故はいかん。その佛の国には諸の邪定聚及び不定聚無ければなり』とあります。

邪定聚とか、不定聚とか、難しい言葉でありますけれども邪定聚と申しますのは、かねてお聞きの通りに、自分は一角よい事を努めて来た積りで、この善根の故に、佛のお浄土に参らせて貰へないか、貰へさうなものと云ふ風に考へてゐるのは邪定聚である、それは邪な心持ちを持つたものである。と云ふのは私共は善いとか悪いとか、毎日のやうに云つたり考へたりして暮して居りますけれども、私共がいいと思つたり、感じたりしてゐる事が徹底的にいいといふ事は、実は一つもないのでありまして、いいと思つてゐた事がとんでもない悪い事になつて来たといふ様な事度かり多いのであります。

私なんか、まあ若い時からの事を考へますと、自分はよつほど、人間として立派にやつて行くつもりであり、又或る場合は立派にやつて来た積りなのでありますけれども、

それは積りだけでありまして、実際、通り過ぎて振り返つて見ますると、自分の立派だと思つてゐた事が、皆きたないけがれた事になつてをります。さうでありますからして自分は本当はけがれて居ながら、如何にも立派であるとばかり思つてゐると、そこが邪定聚と云はれる事でありませう。だから自分が立派な事をしたつもりでも、それでもつて浄土に生れる、試験にでも及第したといふ様な事を考へては大間違ひで、さういふ立派な事をした様な積りで、実はけがれて居つて、世間の言葉で申しますならば、すつかり自分は偽善者であると、これはこの偽善者といふものは矢張り立派な事を言うたりしてゐる人間が一番偽善者なのでありまして、私なんか、その代表的な人物なのであります。若い頃は偽善者にならうなんかと思つて居りませんでしたけれど、さて六十何年のこの生活の道を歩んでまゐりまして、そして自分の今迄の歩みを振り返つてみますと、それはいやなことでありますが、自分が偽善者になつて居るのであります。又さう申しますと、それがまた一寸殊勝に聞えるかも知れませんが、さう云ふ事を云ひながら自分といふものを、また飾らうとするのであります。さうでありますから、私が偽善者であると申しますと、皆さんのどなたかが、サウカお前の話を今迄聞いてゐたが、そんな偽善者だつたのか、それならこれから聞かぬ事にすると仰言ると、チト当がはづれると云ふ様な気がするのであります自分では偽善者だと云ひましても、人からさうだ、お前は偽善者だと云はれると、もうチトよく言つてもらへさうなものだと、かう云う感じがするのであります。

そんなことでありまして、邪定聚と云ひますのは、さういふことであります。いい〳〵と思つて、自分の善根の故にお浄土にまゐることが出来ると思つてゐる、それが邪定聚であります。こんなのは一度根本から転じて、そして本当に邪定聚であつたといふ事になつて、少し廻り道をしてから、始めて今度は正定聚といふ事に転じてお浄土に往生すると云ふことになりますわけであります。

そして次の不定聚といふのは、お念佛といふ事は解つてゐる、ただし、そのお念佛は、佛様を念ずるといふのであるから、佛様を念ずるといふのは自分の力である、又お念佛申す、南無阿彌陀佛と称へると云ふのは自分の力であるそれで佛様の力も向ふにあるんだけれども、併し佛様からさう云つて、南無阿彌陀佛を称へるといふのは自分の力であるから、それで以て佛のお浄土に行くことが出来るとかう云ふ風に考へるのであります。これは半分佛様のものを自分のものであるかの様に思つてゐるので、そこで不定聚と名をつけてあると云ふのであります。

これもお念佛申すのは自分の力だと思つてゐたが、さうぢやなかつた、どこ〳〵までも佛様の御廻向であつて、佛様の方からめぐらし向けて、自分にたまはつたものであるの

自分にはさう云ふ本当のところは微塵もなかつたのであるといふ事に目がさめてまゐりますと、さうすると正定聚に転ずるといふ事になるのでありまして、だから邪定聚も、不定聚も結局は、正定聚と云ふものに転じて佛のお浄土に生れると、かういふわけでありますからして。佛のお浄土には正定聚ばかりである、皆が転じて正定聚になつて、それから生れさせて頂くと、かう云ふ事になりますわけであります。

この正定聚の位といふものは言葉を換へて云へば、必至滅度と云ふ言葉になるのでありまして、必ず滅度に至るとなるのであります。滅度といふものは佛様のおさとりの世界でありまして、必ず自分も佛様のおさとりの世界に入れられる、かう云ふ訳になりますのでありまして、一体私共は死ぬと云ふことについて、どんなことを考へてゐるかと申しますと、それにはいろんな人の種々な考へがあります

死ぬればそれ切りで体は腐り、骨も碎けて、もとの土になるといふ様なもので、スツカリ無くなるのであるといふ風に考へる人もある。或は死ぬれば魂といふもの丈は残つてその魂が何処か別の世界にフラフラと行くのであるといふ風に考へる人もある、そしてその意味で霊魂不滅といふ様な事を云つてる人もあります。又佛様の心持では、そんな死ねば何も彼もなくなつて、虚無になるとする思想も間違ひであると申しますし、死ぬれば今の様にこの魂がなんだか何処かへ行く、霊魂不滅だといふ事を云ふのも間違ひであるといふのが佛教の本当の考であります死んでどうなるものか、死んでみなければわからぬと、かう云ふ事になりますけれど、この佛教の上では、死ねば何もなくなるといふのもそれは間違ひであるけれども、死んでも霊魂が残つてどうとか、かうとか云ふのも間違であると、これが佛教の本当の考へ様であります。

それぢやどうなるかと申しますと、これはまあ私自身がまだ生きて居りまして、死ぬといふ時の事を云へる資格のものでありませんけれども、それには佛教徒として、釈尊の御涅槃、それから種々の高僧達、近くは私が親しく御教を受けました先生方の事を考へて見ますと、どうやら見当がつくのであります。その見当がつくと云ふのはやはり歎異抄に『尽十方の無碍の光明に一味にして』あそこでありまして、この世の命の終つた釈尊始め、善知識の方々がどういふ風になられてゐるのか、それは広大無辺な佛の光明と一つにおなりになつた、さうでありますから、さう云ふ方々のおなくなりになつたあと、私共の心持としての私共の感じは、一方では人間としての苦しさなり、悲しさなりがあります。たとへば私が近角常観先生がおなくなりになつたあとでは、何とも云へない淋しさに打たれたものであ

ります。けれどもその内に、丁度夕陽がズート沈んでそしてあの夕焼けがパット明るく空に輝く、ああ云ふ心持ちがしてまゐりますのであります。

聖徳太子がおかくれになつた事を考へて見ましてもさうであります、日本書紀など読んで見ましても、おかくれになつた時には、丁度明治天皇がおかくれになつた時の様に全国民が一心に悲しんだ、お父さん、お母さんを失つた様な心持ちで悲しんだと云ふ事が日本書紀に書かれてあります。明治天皇の崩御の時の私共の心持ちもさうでありました。それから直接私共の善知識近角常観先生、それから曰杵祖山先生、かう云ふ方のおかくれになりました後も非常な淋しさがありながら、そこには夕陽が沈んで夕焼の空が何とも云へないあかあかとしてゐる、それを我が身に、私の上に受けると、この感じが致しますのであります。

又そんな方面ばかりでなく、私の父親や、母親は、それこそ名もなき民でありましたが、併し自分の父親や母親が亡くなつて、これは私としては十年ばかり後でありますが母が亡くなつて十年ばかり後に、始めてそれを感ずる様になりました。親といふものがなくなつた事は淋しくて悲しくてたまらんけれども、亡くなつた後には、何とも云へない夕焼の輝きがあつて、それが私にずつと照してくるのでありますからして、必至滅度と云はれてありますところのその必至滅度は、ただ何もなくなるといふのでなくて、何も云へない広大無辺なお光なりお力なりが、私に対して、さう云ふ善知識の方々がこの世を去られ、或は私の父や母がこの世を去るといふことが縁になつて、それが深く感ぜられてまゐりますのであります。

それを逆に申しますと、私の様なものは、父を失ひ母を失ふ、善知識の方々を失ふと云ふ様な事があつて、始めて『住正定聚、必至滅度』といふ事に目が覚めて来る、そしてこの善知識のおかくれになつたあとがかうであるから、やつぱり自分は名も無き一人の民に過ぎないのでありますがやつぱり自分といふものが、この世の命終るといふ時にはこの身ながらに、尽十方の無碍の光明に一味にさせて頂く、佛様の光の中に一つにおさめ入れられてまゐると、さうなりますと、一切の衆生を利益すると申しますか、佛様のお力で以て一切の衆生に今の佛様の光明が及んで行く、その一つの縁に私といふものもなり得ると、そこまでうなづかれる様になる所が、こゝの最後の味ひでありませうかと思ふのであります。

（つゞく）

自然法爾（二）

自在丸新十郎

法爾と極楽往生

聖人は『自然はすなはち報土なり』と和讃に仰せられてゐます、これは大辺意味深い言葉です。自然は煙が空に昇り、水が海に流れる様に、誠に滑かで無理がありません。極楽行の汽車が軌條の上をすつと走つて、私達を極楽浄土につれて行つて下さるやうなものです。

極楽浄土は法則通りに出来上つてゐます。即ち国王である阿彌陀如来と国民である菩薩衆と佛国土といふ三種の荘厳（真実清浄のもの）から出來てゐます。そして三種の荘厳は清浄であり、眞実であるといふ点に於て一法身でありますから、互に違つたものではありません。三種の荘厳は広相であり、一法身は略相です。そして広相と略相とは相即相入して、多即一、一即多の関係でありますから広略相入です。極楽浄土は広略相入してゐます。原則的にはこの世も広略相入してゐます。だから娑婆のこの世から、極楽へ無理なくすべりこみができる次第です。宛も円の中に円が入り、四角の中に四角が這入る様なものです。もし四角の中に円が入り、円の中に四角が這入るやうだと、何処かに無理が生ずるに決つてゐます。

一体佛教と云ひますと、いかにも特殊な教の様に考へられてゐますが、決してそんなものではありません。世の中は法則通りに出来てゐるのに、法則通りに運転致しません。それは車に摩擦が多くてきしり合ひますから、滑らかに運転しないだけです。だから人生問題とか社会問題とか国際問題とかいつた思はしからぬ軋轢が生じて、苦悩や闘争や不和が生ずる所以です。佛教は軋轢を生じ易い車輪に油を注いで、摩擦をなくして法則通りに円滑に運転させる

役目をもつたものです。謂はゞ潤滑油の如き働きをもつたものにすぎません。

法爾とは法則通りになることです。法則通りに出来てゐることです。法則のまゝに動くことです。宇宙自身は本来法爾です。法則通りにできてゐます。私達の精神も法則通りに出来てゐます。だから一切法は一切法のまゝです。極楽浄土も亦法則通りにできてゐます。法爾のすがたをし、また法爾の働きを出してゐます。法則通り現はれ、法則通りに動いて、法則通りに機能を発揮してゐるから自然です。もし法則通りに出來て居らずに、法則通りに動いてもゐないとすれば、何処かに無理が現はれて自然ではなくなります。だから自然である為には、すべてが法則通りに出来上つて、法則通りに動かなければなりません。即ち自然は法爾を必要とし、法爾であれば必ず自然であります。

然るにこんなことは、極楽国でこそ成り立つ事柄で、極楽国は正に自然法爾の見本です。私達の娑婆世界では、仲々以て総てが理論通りに自然法爾になつてくれません。法則通りにすべてが動いてくれません。自然であるべき筈のもの一切法が不自然に動いてゐます。柔軟に滑かに動く筈のものが、きしり合つて動いてゐます。それでは消耗がひどすぎます。全能力が発揮されない所以です。従つて世界が自然であり法爾であるためには、佛教の実践が要請される所以、佛教といふ減摩剤が必要な所以であります。即ち法蔵沙門の殊勝な計画に従つて、唯阿彌陀如來といふ名号を称ふればよいのです。称ふることは聞くことであり、聞くことは信ずることです。阿彌陀如來を信ずれば、法蔵沙門の誓願不思議の力によつて、阿彌陀如來とその本性を同じくする法身如來にさして頂けます。即ち無上佛です。法身如来の世界には摩擦や抵抗はありません。娑婆の極楽化がなされる所以であります。

私達が彌陀の名号を聞信して、法身如來になさして頂くといつても、それは何も無から有が生れ出るわけではありません。元々私達は法身如来であります。それが宿業の因縁によつて、現在人間世界に生れ出てゐます。その人間が、阿彌陀如来の大きな信力を蒙つて、法身如來になさして頂いたところで、それほど不思議とするには当りません。

佛教では法身如來から人間に生れることは迷とされ、人間世界から法身の世界に帰してもらふことは悟とされてゐます。だが法身如來には迷とか悟とかいつたものはない筈です。迷悟を区別する所に既に人間の迷があり、迷悟を見ない所に悟があるとも云ひ得ませうか。結局私達は迷つてゐるが故に迷であり、悟つてしまへば悟であります。たゞ南無阿彌陀佛といふ佛名を如実に聞くところの増上縁が必要なことは申す迄もありません。

飜つて自然を眺めてみませう。自然は前記のやうに、自

分に対するもの、それは物質的なものであれ精神的なものであれ、及びそれらの間の種々雑多な出来事を指してゐるやうです。例へば、のどかな春日和に、雲雀が青空に舞ひ上つて鳴きさへずるのも自然であれば、今日この頃の様に目がさめるほどに山一面が紅葉であるのも自然であれば、煙は高く上り、水は低きに流れるのも自然です。こゝには私達人間の意志といふものは動いてゐません。青空に雲雀を舞ひ上らせようと思づたが故に舞ひ上つたわけでもなければ、満山を紅葉で埋め尽したいと思つたが故に埋め尽されたわけでもありません。どんなに人間が強い意志と熱情を以てしても、雲雀を舞ひ上らせ、満山を紅葉にすることは出来ません。万事このやうに、自然は私達人間のはからひの及ばぬ所で起つてゐます。

河水は高い所から低い海に流れてゐます。誠に自然です。だが私達はダムを築いてこれをせきとめて池を作り、その一端から水を落してその力を利用して水車を廻転させて発電させることが出来ます。この際、河水には人間の意志が加はり、文化発展の資材として意志通りに動いたこと故、計ひが加はつてゐると考へ易い。そして大自然を征服したなどと大それたことをいつてゐます。所がよく考へると、水はダムをせきとめられたが為に、低きに流れる水が高く流れたといふことでもあればともかく、さうでなく、水はその本性に従つてやはり低きに流れて漸次水嵩をまし、遂にもちこたへられなくなつて、ダムを越して下の方に流れ去ります。水は相変らず本性のまゝに動いてゐるのであつて、決して人力または人智に征服されたわけではありません。

ところが更に進んで、水とは何であるか、また本当に流れてゐるかどうか、といふ水の本性について考へてみませう。

水は今日の科学では、酸素と水素といふ二つの元素から出来てゐます。これらの元素は更に、素粒子といふ私達の目に見えない、物質ともエネルギーとも区別されないものから出来上つてゐます。水は山や谷や平野を縫つて海に出ますが、山も平野も海も空気も亦、水と同じ素粒子から出来上つてゐます。水そのものは素粒子であり、山も谷も海も空気も素粒子であるとしますと、一体何が何処をどうして流れてゐるのでせうか。仮に山や谷や平野や海の代りに、素粒子といふ言葉を入れてみますれば、『素粒子は素粒子から素粒子を通つて素粒子に入る』といふことになり、すじが全く通らぬ言葉であります。素粒子の世界には流れるといふことは全くありません。皆が素粒子だからです。水の本来の性質は、このやうに全く流れないのです。堪然寂静そのものです。私達は水は高い所から低い所に動いてゐると思ひ込んでゐるけれども、それは眞実ではありません。本来水や山や平野や海といふ違つたものはないの

です。佛教での総ては法身であるといふことに相応します。

こんなに言へば、言つてる私は至つて物事が判つてゐるかに見受けられますが、実は私自身素粒子であります。素粒子である私が、素粒子である相手の方に話したり説明出來よう筈はありません。かくいつてるのは、たゞ理屈を吐いてゐるだけで、理屈を吐いてゐるのは私といふ一個の愚かな仕末におへぬ人間にすぎません。私の本性たる素粒子ではありません。私自身が本当に素粒子に生きてゐるとすれば、相手の素粒子のことを考へたり、又相手の素粒子に説明出来よう筈はありません。自分が自分を考へ、自分に説明するやうなものです。それは、何も考へず、何も云はず、唯あるがまゝにあるのが、川の流れを本当に眺め本当に考へてゐるといふことにでもなりませうか。

川の流れは一例に過ぎません。総ての自然もたゞあるがまゝにあるだけです。法爾とはかうしたことを表現した言葉でありませう。私達の計ひうるものではありません。『自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず。然といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず』と祖師が仰せられたのは、正しく自然を本当に観察された体験の言葉でありまして、自然と一体不二のの境地に体達せねば味ひえられぬ言葉だと拝察します。私達は本來法性法身であり、自然も亦同じです。万物一法身（佛教では一如とも申します）の世界に、思議判断といふ様な計ひがあらう筈はありません。

雲雀が青空高く舞ひ上つて美しい声で鳴いてゐるといふだけでは、自然の眞の観察ではありません。美しいとは、既に判断であつて計ひです。青空とは色の識別判断です。これ亦計ひです。雲雀が青空高く舞ひ上つて美しい声で鳴いてゐるまゝ、それが美しい声とも、青空とも、高い所とも低い所とも、舞ひ上つてゐるとも舞ひ下つてゐるとも、何とも思議判断されないのです。たゞ私達の心の鏡に映ずるだけです。思議判断の素材にはならないのです。舞ふまゝであり、鳴くまゝであり、青空のまゝです。如何に計はんとしても計ひ様がありません。或は説明的解釈に堕する恐れがありますが、青空に法身を認め、雲雀に法身を認め、美しい声に法身の妙音をきくとでも云ひ表せませうか。然し認める当方も亦、人間の境界を超えて一法身となつて認めるといふことにならなければなりません。だから全体から云へば一言半句言葉はないのです。考へやうがない筈です。佛教では、義なきを義とするとか、言亡慮絶とか、維摩の一默雷の如し、などの言葉で表現されてゐますが、何れも佛教体験の極致を表現された無言の言葉であつて、こんな所には言葉はありません。たゞ南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛です。

歌心そのをりをり

柳瀬留治

己を知るといふこと

己を知るといふことは、我々一人々々の生涯をかけて、その根底となるべき大きな仕事である。自覚といふもそのことである。

よく人に対して不平不満をいふ人がある、理想家とも見られるが、矢張りこれは己のわからぬによる。又これを自身に向け、自己批判のみをし、自身に不平不満をいひ自虐をしてゐる人がある、これは道義者に見えるが、これまた己のわからぬによる。

誰も己が真直ぐだ、正直だとし、己のいふことは正しい、見方が正しい、理が通つてゐると主張する。

動物には己といふ自我意識はないが、これに代る本能があつて、己の欲望を貫かうとしてゐる。人間も本能的に己を肯定する。肉体そのものが本能的に出来て居り、肉体を容器とする精神は本能的に自我を肯定し、主張し、他と闘ひ、これを守ることをする。他の動物とさう変らない。文化をもつといふ点だけの差はあるが、これもまだ功利を出ないもので、むしろ動物より不正直で、一層自我的ともいへる。

己とはどんな代物（シロモノ）か。これは持主の御本人は最もよくわかつてゐさうなものであるが、当の本人になると自分自身に中々わからぬ。何にあれ、何処までも主張し守つて行くに精一ぱいになつてゐる。この自我、我執のみで、己自体に対して盲目的である。

孔子のいふ「知命」といふこと、佛家の「悟り」といふことは、この己を知ることである。だが己の力で己の身体を持ち挙げられぬ様にそれには一大飛揚を要することだ。

東洋では道徳に於ても、又芸術においても沒我といふ様に己れが無我になつて、天眞の善が解り、眞の美が表はれ

るといふ。それは自我の邪念から解放されることにより始めてぢかに真に触れ得られ美をなすからである。短歌の真の美もおのれが素裸になれて初めて表はれるものである。己が素裸になれるといふことは、自ら手放しになれること、自我の囹圄から解放されること、自我我執から離れることである。

我執から脱れ得ると己の代物の真の値打がわかる。他人に対し社会に対し不平不満を余りいはなくなる。己がわかるといふことは人間といふものの底がわかることである。

自我の固執から脱して始めて自己の正体が分るのであるが、さてそれを捨てよ、離れよといはれれば、より固執し放されない。即ち自我以外に自分自身の力にするものがないうちは、自己自身を命の綱を掴んで離さない。ところがつまらぬ値打ちのない己より、もつと遙か偉大なもの、力になるものが與へられ、大きな価値に触れて始めて放せるのである。それは結局偉大なる宗教による外に道はないことである。

己以上の力強い偉大なものに遇ふと、己の小さい醜いものたることが底からわかり、我執の値打なさがわかり、その大きな力の前に頭をさげる、これは私に於ける念佛なのである。念佛において、機の深信といつて、己の無価値の分ることは、須く法の深信による、即ち大なる力に引揚げられて初めて己を捨てられ、道徳の窮屈な規制から脱して、自然に自由に「己が心の欲するままに從へど則を越えず」といふ底の、ありのままな気楽さに生涯を過せる。

斯く己の代物がわかり、人間性の根底がわかると、生活上如何な不運に遭遇し、どう立場が崩れようと驚き悲しむことなく、外界の如何に動揺せず生きて行ける。

窪田空穂先生は、歌は態度の芸といはれる。不動の態度が得られるといふことは歌に限らず、凡そ人間生涯生きて行く上に最も根底をなすことである。

短歌草原、昭和廿六年、四月号

作歌は小安の具でない

さきに己を知るといふことをいつた。蟹は己の甲羅に似合つた穴を掘るといふ。だがそれは浅く小安に止まるの意ではあるまい。身分知らずを誡めたまでのことで、本当に己を知つた深く徹したものであるべきである。一は全である。一を深く知り得たら全を掴むの機枢を得る。広く表面のみを撫で廻しても真といふものには触れ得られるものではない。だから小さくも真に徹するといふことである。すると自然に全に通ふのである。

自らを知り己に安んずるといふことは、己の小器を知り小さきに安んじ止まることではない。諸君中に、身体の健康に安んじ、家庭の小幸福に安んじ、職業の小安に足つて、人生に深く徹せんとせず、浅い人情、小さい喜びや悲しみを撫で廻し、表面的小情趣を行きつ戻りつするに終始してゐる向がある。これではまことに不幸な人といはねばならね。それかと云つて柄に不似合な望みをとはいはぬ、小さくてよい、わが現在を脱皮して深く人生を徹して欲しい。小幸福は誠にさもしい、かけらふの夢である、やがて消えるあさはかなものである。甘く浅傳なその境を脱皮して、人生に徹し生命に徹した金剛不壞の境に至つてほしいといふのである。

歌は態度の芸たることは屢々のべて來た、小芸術に過ぎないが、その深いといふことはこの人生に徹した態度の現れたるが為めである。

小自己の不平不満や愚痴から解脱することも、亦小幸福小安心から解脱することも、等しく一小物の裏と表たるに過ぎず。共に脱却すべき小自我に過ぎない。快よい薄い絹に包まれて楽しとしてゐるのは、心地悪い生活に汚れた上衣の不満よりは脱ぎ捨て難いであらう。然しいづれも單に上衣にすぎないことは同一である。

佛教では火宅無常の人生なるを力説して夢を揺りさまさうとする。その経典に面白い譬喩がある。火のついた家の中に幼兒等が楽しみ戯れてゐて、何といつても外に出ようとしない。そこで子供達を方便し、外に大きな白象が來てゐる。早く來て乘りなさいといはれ、幼兒達は初めて屋外に出て、火宅を免れたと釈尊が説かれてゐる。私共は小幸福を纏つて嬉しがつてゐるのは、全く火宅の譬と同じだと思ふ。

我々の一生は、短いかけらふの生涯である。人として生れた甲斐に、本当に人生に目覚めた境地を得て、徹した人生態度をもつ歌一首でもよい、生きたかたみに詠み殘さうではないか。

短歌草原、昭和廿六年、六月号

柳瀬氏歌集「霜髪」抄出

あした明けていたく霜髪となりにけり霜の厳しく
いふ人もなく
なみ〳〵とつがるる酒の嬉しきに手うち膝ゆり心
むなしき
舌にしみ喉にしみて秋の夜の侘(サビ)しさ消えつ淡き柿
の味
術あらぬおのれ〳〵を揺りさまし眼をあげて仰げ
大御佛を

編集後記

余寒なほきびしいことでありますが、梅の南枝はすでに清香を放ち、一輪一輪と春光を告げて居ります。

大地はかくてきびしい凍結から解放され始めてをりますが、人間界の自由社会と共産社会とのきびしい対立抗争が何處にそのやはらぎを見出し得ませうか。はてしもなく対立のなりで、時に抗争し、時に妥協するといふ波動を無窮に繰り返すことでありませうか。

チャーチル英首相は、波瀾の多かつた八十年の生涯を基盤として「光の輝かしさも影がなくては存在しない人生とは一つの渾然としたもので、善悪相ともに、そのまま受け容れなければならない」

と述懐して居ります。然し果してさうしたことが実行出来ませうか。成る程苦労すればする程、人生に対してより深い理解と同情も出来ませうが、矢張りそれには限度があります。そこに「善悪の凡夫を憐びんし定散と逆悪とを矜衷し給ふ」広大無辺の大悲の海に帰入して『衆水の海に入りて一味』の救いを被る外に光は射しません。

聖德太子の「人はなほだ悪しき者はすくなしよく教ふればしたがふ。それ三宝によりまつらずば何を以て枉れるを直うせん」の慈訓が独り燦として輝きます。

○

△願成就文は他力信仰の極とも申すべきところで、先生の御講話も微に入り細に渡つて懇切をきわめて下さいました。最近東京都文京区眞砂町三六の福村書店から「教育生命の原理」の著書を出版せられました。定價五五〇円。先生の永遠に求道不止の気迫が溢れて居り、志ある方々に御勧め致します。御往所は東京都調布局区内神明町下仙川七九四番地。

△自然法爾の自在丸先生の御原稿につき御遠慮なく戸畑市中原、九工大官舎の先生に直接に御質問されますやうにと、特に御申添へます。

△歌心その折々は、柳瀬先生の二十七年間主宰者となつて発行し続けて居られる短歌草原誌の冠頭言を頂きました。先生は窪田空穂師の流れを汲まれつつも独自の歌境を拓いて居られ、特に絶対他力信の流露としての短歌の妙を教へます。

短歌草原は定價五十円　送料四円
発行所　東京都渋谷区代々木町七三一番地の御宅です。

＜太子の御挙言は今回はその傳承の有様を主に述べましたが、次号でその内容を誌しませう。橘女王の救済がそのまま私共の救ひの　となりますやうに念じて居ります。

聚　墨　生

慈光　第七卷　第二号　昭和三十年二月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

日曜講話案内
毎月　第一、第二、第三日曜　午后一時半
於、　一道会館

昭和三十年二月十日印刷
昭和三十年二月十五日発行
毎月一回十五日発行
一部　十七円（郵税共）
定価　半年　百円（郵税共）
一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番